

翻刻『大坂御仕置御書出留』

くすりの道修町資料館 佐藤 敏江

中之島図書館 山田 瑞穂・北川 敬子

中央図書館 上村 厚貴・小笠原 弘之

苗村 昌世・日置 将之

八木 美恵

はじめに

原文書は大阪府立中之島図書館蔵(文書/七)一冊(二十六×十九cm)表・裏表紙各一、本文六〇丁。

本冊は明暦三年(一六五七)から寛文六年(一六六六)の十年間に、大坂町奉行所から大坂三郷(北組・南組・天満組)に対して出された町触を南組惣会所で控えたものと思われる。

中之島図書館には同様の史料として、元和八年(一六二二)から明暦三年(一六五七)にかけての『大坂御仕置留』(文書/六)一冊があるが、これは今回翻刻の『大坂御仕置御書出留』に先立つ時期のものである。尚、『大坂御仕置留』は、大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センターが翻刻し、『近世大坂町触関係史料2』として刊行されている。この中で塚田孝氏は「御仕置」について「町触などの町奉行所からの指示全般を、当時「御仕置」と呼んでいたのではないかと推察している。

本冊に登場する大坂東西町奉行の在職期間は次のとおり。

東町奉行

松平隼人正重次(重継)・慶安元年(一六四八)二月十六日〜寛文三年

(一六六三)四月十一日/石丸石見守定次・寛文三年(一六六三)八月

二十五日〜延宝七年(一六七九)五月十一日。

西町奉行

曾我丹波守古祐・寛永十一年(一六三四)七月二十九日〜万治元年

(一六五八)三月十九日/曾我又左衛門近祐・万治元年(一六五八)

三月十九日〜寛文元年(一六六一)九月十三日 ※古祐の嗣子/彦坂

彦岐守重紹・寛文元年(一六六一)十一月十一日〜延宝五年(一六七

七)九月十三日。

参考

「大坂御仕置御書出之写」「大坂御仕置留」(近世大坂町触関係史料2) 塚田孝・近世大坂研究会編 大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター 二〇〇七年 ほか

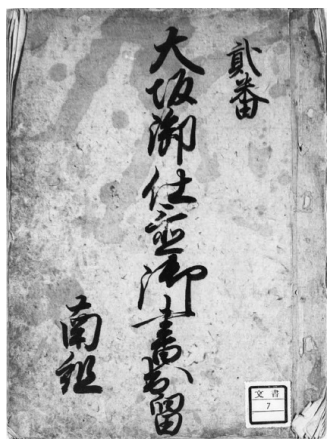
凡例

原本の忠実な翻刻を原則とし、旧漢字はそのまま表記した。異体字は標準の字体に改めた。但し方(より)はそのままとした。かなの古体・変体は原則として現行の平かなを使用した。但し、江(え)・与(と)・者(は)・茂(も)などの慣用字は、原本のままとし小字で表記した。

反復記号「>」「<」「<」等は原本の通りに表記した。

確定できなかつた文字には「(カ)」を補記した。追筆等は本文中に繰り込み、書き損じ等特にその必要を認めない場合は省略した。

表紙



十二・十三丁

Handwritten text from the document, including the date '三月八日' and various administrative instructions.

『大坂御仕置御書出留』

〔貳番 大坂御仕置御書出留 南組〕

覚

- 一 夜番之事 添番を申付 四つ前ハ自由ニ往還いたさせ 四つ以後 通り候者ハ町送りに可仕旨 最前申付候 然処此間ハ五つ打候 得者通不申候由 往還之もの可為不自由候条 先年方申付候こと 四つ迄ハ自由ニ通 亥刻以後者改之不審成ものハ町送りニ いたすへき事
 - 一 付火いたし候ハ、隣町之者早く出合消可申事
 - 一 添番を差置 其外ハ常之ことク万事いたすへく候 此覚書者惣 代共手前之覚書ニいたし 町と江者此方方申付候通 無相違様ニ 口上ニ而切と可申付候
- 三月八日

覚

- 一 下り御番衆之若黨小者致欠落 當地相残候もの町中に宿借申 間敷候 若隠置候ハ、家主ハ不及申 五人組共ニ可為同罪候間 左様之者於有之者宿主を召連可参事

- 一 欠落之者 女房を預り候もの有之者 町中之者其宿主と女房を召連番所へ可罷出事
- 一 出替之者 毎年正月如相触候 八月廿日過宿かし候もの可為曲事事

右之通町中可相触者也

酉八月八日

覺

- 一 本願寺門徒之外町屋に出家致 住宅旦那を集候儀 此已前より停止之事

付往来之出家當座之宿日數廿日ニ不可過事

- 一 唯今迄町中ニ有之道心者男女共其儘差置へし 但其道心者不屈之義於有之者 宿主ハ勿論年寄 五人組曲事たるへき之間 常と心を付不審成義有之者其町中より申來へし 様子聞届可申付事
- 一 今度穿鑿以後他所より道心者來におゐてハ能と遂吟味 誠之道心者ニ於無紛者宿を可借 不念之義有之者其町中曲事たるへき事

右可相守此旨者也

酉八月廿七日 隼人

大坂

丹波

三郷

覺

- 一 町中公事訴訟一事たりといふ共滞候義有之間敷候 然共我等罷下候以後丹波守存候と隼人殿江可申事於有之者唯今申出へし 後日ニ致訴訟といふ共隼人殿承引有間敷之条可存其旨由 可相触者也

酉十二月朔日 丹波 三郷惣年寄

條と

- 一 大坂町中御仕置之儀弥公儀大事ニ奉存度と申出御法度不可致違背事

對公儀惡心有之輩不依何事以計策頼輩あらは不移時刻申へし 領知にても金銀ニ而茂其約束之一倍御褒美可被下候事

- 一 吉利支丹宗旨之儀 無油断於町と年寄 五人組改之不審成者有之者早速申出へし 宗門ニ於相究御褒美可被下候 萬一隱置輩本人ハ不及申其町之年寄 五人組可致処重科事
- 一 牢人宿を借す事停止たり 聊不可致違背 若於隱置者先年如申出宿主百日 五人組同罪籠舎 其町之年寄五十日籠舎并請人有之ハ穿鑿之上或死罪或籠舎たるへし 縦請人有之といふ共牢人之宿不可遁其答事

付牢人惡事いたすに於ゐてハ依科之品請人宿主可為死罪事

- 一 町中火用心油断すへからす 兼而如定置亥刻以後者町と門を立へし

但用事有而往還之輩無異儀通し町送りニ可致事

右堅可相守此旨也 仍如件

- 一 博奕其外賭之勝負停止也 若相背者於有之者 先年如相触其衆中并宿主家屋敷欠所たるへし 親懸り之者者 親者家を令欠所親子とも大坂を可追拂 但親申出ニおゐてハ親之家屋敷不可及 欠所然上ハ子可為籠舎之事

付宿之兩隣五人与可令籠舎之間見聞次第ニ早速可申出事

明曆四年戊正月十一日 隼人

丹波

一 明曆元乙未年當町中へ書渡三郷會所へ出置候帳面之条数

一 慶安元年四月五日諸商賣其外仕置九ヶ条之事

一 同年同日町中御法度七ヶ条之事

一 同年同日町人作法申出候書付八ヶ条之事

一 同年六月五日物會所並町と懸銀請拂之儀申出候書付三ヶ条之事

一 同年極月十六日自身番之仕置五ヶ条之事

一 慶安元年九月十九日火事之時荷物退候仕置三ヶ条之事

一 同年極月廿一日家屋敷賣買之儀申出候三ヶ条之事

一 同年同日諸商賣并家屋敷賣買跡式等之儀申出候三ヶ条之事

一 承應元年八月十八日御番衆米買候仕置三ヶ条之事

一 每年正月十一日ニ會所江町中へ出銀請拂之儀申渡候三ヶ条之事

一 御番衆下と并出替之者 宿と仕置三ヶ条之事

一 承應元年二月十八日火事出来之時仕置三ヶ条之事

一 同年六月二日三郷惣年寄人数并相果候跡相續之様子書上ヶ候 通聞届候との書付三ヶ条之事

一 同年七月二日町中家屋敷賣買之書付三ヶ条之事

一 同年八月十九日御番衆 御加番衆下と賣掛仕間敷旨申付候書付三ヶ条之事

一 承應二年二月廿一日町人女房敷銀 諸道具 衣類等跡目仕置九ヶ条之事

一 同年三月廿二日米中買仕置三ヶ条之事

一 慶安五年八月廿三日町中牢人之儀付而惣年寄連判手形文言三ヶ条之事

一 同惣代共連判手形文言三ヶ条之事

一 掟之書出十九ヶ条之事

右年と申渡候書付任一冊 明曆元年十月十三日惣年寄召寄相渡候帳面之通 弥以可相守候 彼帳惣會所ニ有之上ハ今後改之不及書渡候間 町と之年寄月行司等會所へ呼 前廉之帳面読聞町と写取 末と借屋之もの迄も不相背様ニ可申渡候 若違背之者有之而 及僉儀之時 件之書出不致承知候由申者 惣年寄不申渡候敷 又會所之申渡を其町之年寄町人江不申聞候敷 穿鑿之上不念之方可為越度候条 能と可申含者也

万治元年十月十一日 又左

隼人

三郷惣年寄中

覺

- 一 去年當年在と所と耕作損亡之所と有之也 其上材木山出付而米全費之間酒造候儀江戸 京都 大坂 奈良 堺其外名酒之所と又者諸国在と所とニ迄迄例年之半分當年来年ハ可造之 并新規之酒屋一切可令停止之 若於致違背者其所請人 御代官可為越度 自然蜜とにおほく造之輩あらは可出訴人 御褒美被下之其上あたを不成やうニ可被仰付之 勿論酒屋ハ可被行罪科事
- 一 耕作損亡之百姓可窮困之間 此上不草臥様ニ入念仕置可有之事
- 一 從先年如彼 仰出之對土民不可成非義 若又作毛不損毛之處ニ申掠年貢令難渋者可為曲事之事
- 一 在と所と雖為御鷹場年内方かゝしをいたし麦をまかせ可申事
- 一 鹿猪おはせ可申 勿論取來候所と猶以可為其通事

戊十二月廿八日

右之御条数從江戸被 仰下候間 此旨堅相守候様ニ町中可相触者也

閏十二月九日 又左衛門

隼人

大坂三郷

條と

- 一 廻船之作法寛永拾三年八月二日之日付ニ而從江戸大坂迄之浦とへ被遣候御制札之旨 堅可相守事
- 一 遭難風之刻たすけ船を頼候儀 近き所ハ成程精を出し 破損無之様可仕事
- 一 船破損之時其浦之者を頼 情を入 荷物を取上ケ 其あくる荷物之内 取揚候者に御定之通無異儀可遣之事
- 一 沖にて荷物をはね候時者其所方近き湊へ揚り 如御制札之代官庄屋へ相断穿鑿を請 舟ニ相殘荷物之分書付證文を取參へし 證文於不分明者荷主申來へし 吟味之上急度可申付事
- 一 船頭浦と之者と申合 荷物を盜取 はね候由申におゐてハ船頭ハ勿論加子老人も不殘死罪たるへき事
- 一 五三沖に船をかけ有之而船方舟人荷物を賣候儀曲事たるへし 若令違背賣買いたすにおゐてハ賣候者も買候者も死罪たるへし
- 一 但穿鑿之上輕重可有之事
- 一 付自分之荷物にても船中ニ而一圓賣買仕まじき事
- 一 於浦と御制札之旨令違背 破損船有之時たすけ舟を不出礼物を取令難渋者 從鳥羽下ハ江戸へ申上 同所より上方ハ帰帆之刻此方へ可相断事

一 順風無之船中にて日数を送り糧米につまり候時者何方ニ而も其湊へ揚り買申へし但其所ニ賣米無之時ハ船中之米を取つかひ荷物あくる所にいたりて可致返濟事

一 難風にあひ舟致破損 荷物はね候由偽 船頭荷物を賣候儀於有之者 其舟之加子其所之代官 庄屋方へ早速訴人いたすへし然上ハ縦同類たりといふ共 其科をゆるし 褒美を可遣事

右慶安五年八月十四日書出之通廻船中致相談 浦と御制札之旨船頭 加子ニ申含 堅可相守此旨者也

追加

一 江戸廻船之荷物於大坂 兵庫両所可積候由致約束 不殘大坂ニ而積立於川口破損有之儀曲事たり 向後ケ様之不届有之ハ船頭楫取 水主等先令籠舎穿鑿之上死罪可申付候条 廻船中間此旨を相心得 無油断吟味いたすへし 若船主私曲於有之者勿論不可遁其咎事

一 大坂川口出船以前に破損舟出入之事 穿鑿之上船頭不届ニ而令破損者 其割符荷主へハ相懸からず 運賃者其儘遣之 取あぐる荷物ハ大坂傳法其外廻船中として右約束之所へ積届へし自今以後於川口 船頭不届有之者 其割符廻船中江可相懸事

一 公儀御用ハ不及申 諸大名衆并商賣人荷物材木以下江戸へ廻船之船頭 水主 川口ハ勿論 泊と浦と御制札之通 不相背様ニ

念を入相届へし 若いたつらをたくみ滞儀於有之者 可為曲事 事

付他国之船頭 水主ハ大坂舟宿之者此趣申含へし 穿鑿之時

不存と申もの有之者船宿可為越度事

一 廻船荷物之事 船問屋請取置船之善悪并船頭 水主等之儀 荷主ハ不知之 問屋吟味仕舟積いたさせ候上ハ 彼舟之舟頭 加子荷物を盜取全紛失者 其品と問屋より荷主方へ可弁償之 勿論右之悪黨依科軽重 或死罪或籠舎可申付事

付問屋請取置荷物 出船を聞立早速積廻しへし 廻船無之由 偽を申久と荷物預り置におゐてハ可為曲事事

一 とき船商賣之者共 古船を買取 其儘舟にて賣買いたすに付而常に船をも不致所持者 彼舟を買取少と繕之 問屋と致相對 荷物を請取積廻に付而 破損舟多有之由 其聞へあり 向後者當座ニ舟をほととき板ニ而賣買すへし 若如此之船を求置於致商賣者 遂穿鑿双方可為同罪事

右条と堅可相守此旨者也 仍如件

万治貳年正月十一日 又左衛門 大坂

隼人 三郷

覺

- 一 先年より御法度之通町中ニ不審成者罷有候哉 町々年寄 月行 司無油断 借家之者迄切と相改 若あやしきもの有之ハ早と可申来候 隱置脇より相知候ハ、年寄 月行司 五人組可為曲事事 牢人をかくし置候哉 右同前ニ切と町と可相改事
- 一 町人大脇指を不指様に町とニ而改可申候 長きわきさしを指候 町人於有之ハ見合にとらへ候得と申付候間 當所他所之者ニかきらす其者ハ高麗橋ニさらし 先例之通ニ申付 其主人 其親他所之者ハ其問屋宿主籠舎可申付事
- 右之通於三郷會所町と之年寄江申聞 町と年寄より家持借家之者迄に入念申含候様に可申渡者也

亥六月朔日

覺

- 一 米中買之者蔵元之米を買 三分一程之代銀を出シ 勿論日切之約束者雖有之 其日銀をのはし手形を順とニ賣候付而 米之直段高直ニ成候 此賣買先年者無之候 近年中買之者仕出就中大坂計にて之商賣に而候故法度申付候事
- 一 蔵元之米を買 三分一程敷銀を渡之 其銀子利息を加順とニ手形賣渡 約束之日切を相延付而 一枚之手形 一日之内ニ数十人之手ニ渡り米高直ニ成候由申候 其上米下直ニ成候得とも買請候町人蔵元へ銀子を濟兼 納之 買主ニ米をはやく請取候得と初之

買主致催促候へ共 下直ニ成候へ者 可賣渡様茂無之 中間之出入ニ成 先年も双方籠舎申付候事

- 一 蔵元衆手前たとへハ壹万石米を賣付 手形を渡 三分一程之敷銀を取其米蔵元へ預ケ置候得者いつ迄有之而茂損者無之付而約束之日限より外ニ被相延候与聞へ候 左様之蔵元ハ米を買候者多候付而ゆるかせニ被仕候故 いにしへ無之手形之賣買仕候よし諸町人申候 又蔵元ニ無之米先手形を賣渡シ 三分一敷銀を取連とニ米をのほせられ候 旁も有之様ニ下と申由ニ候 乍去左様ニ町人之可致様成義ハ蔵元之面とハ被仕間敷事ニ候間 承引ハ無之候 萬一左様之才覺於有之者急度可相断事

午三月廿二日 隼人

丹波

右之通承應三年三月廿二日先奉行衆三郷之惣年寄并米中買之者共ニ書付被相渡 其刻西国方蔵元之面とへも被申渡候 今程米高直に候間 弥相背申間敷候 若此書付違背之輩於有之者賣候ものも買候ものも可為曲事候 蔵元之侍中ニ相違之仁有之者其主人江可相断候間 米屋中堅可相守此旨者也

万治三年正月十一日 又左衛門

- 一 御番衆之米延銀に請取さきく之買手不吟味ニいたし賣渡候付而 當年者出入多候事
- 一 向後御番衆之米請取拂候者 早速代銀を濟シ可申候 其身出兼候ものハ町中としてすませ可申事

一 米屋ニ而茂無之者御番衆之米を請取さきくへむさと賣付代

銀濟不申候とて訴状差上候とも不可有裁許之間 年寄 五人組

左様之者可致僉義事 右御番所之米を買候もの當年色と作り事

をいたし いたつら者多候付而籠舎申付候 自今以後可致其覚

悟者也

辰八月十八日 隼人

丹波

覚

去とより去年迄於諸国酒造之儀可為累年之半分旨相触といへ

とも 當年打続雨ふり洪水付而耕作損毛之地有之也 今年も猥

に米を費へからず 酒造之儀江戸 京都 大坂 奈良 堺并名酒所

と其外諸国在と所と四年以前迄造来欠数其所之給人御代官方

入念改之 其半分造せ申へし 勿論新規之酒屋一切令停止之

若致違背おゐてハ給人御代官可為越度 万一蜜と多造来輩あら

は訴人ニ出へし 御穿鑿之上其品ニより御褒美之高下有之而急

度可被下之 且又あたをなさゝるやうニ可被 仰付之 彼酒屋可

被行罪科事

右急度可被申付之者也

万治三年八月廿二日

此御書付從御老中參候写ニ候条 町中酒屋共可相守此旨者也

子九月三日 又左衛門

隼人

差上申手形之事

一 町中酒造り之儀當年も去と年去年如彼 仰付候半分造り可申旨

奉得其意候 江戸方參候御書付之写 惣會所へ御出シ被成 拜見

仕候事

一 去ル西之年迄面と作り申米高去年七月書上ケ申候 其半分當年

も造り可申候 酒屋致住宅候其町之年寄 五人組吟味仕 半分方

多作せ申間敷候 又其町之年寄酒屋にて候ハ、町中として年寄

手前吟味可仕事

一 新規之酒屋弥御停止之旨 奉得其意候

右之通相背申間敷候 自然密とニ而多作り候酒屋御座候而訴人

出候敷 又ハ脇とより被成御聞候ハ、御穿鑿之上江戸方御下

知之通酒屋ハ死罪并其町之年寄 五人組ハ籠舎可被仰付候間

無油断吟味可仕候旨 畏奉存候 為後日連判之手形差上申候

仍如件

酒屋連判

万治三年子九月三日 同 五人組

同 年寄

御奉行様

覺

一 大坂町中米賣買ニ付而市を立候儀 并手形を以さきく致商賣事停止之旨度と申渡候 弥以違背仕間敷事

一 大名衆之米を何程買候共早速藏方出之可相渡候 賣候日より日數三十日之外於相延候者双方共ニ曲事たるへし 但賣候方ハ其藏米を肝煎候町人藏米之肝煎無之者其屋敷名代之町人曲事たるへし 其上を以藏屋敷之待中へも可相斷事

一 賣米藏出シ時分其買主へ可相渡候 余人右之買手形持來候共米を渡ましき事

一 問屋を頼米を買 其米江戸へ廻シ候ニおゐてハ早速船積いたすへし 其外京伏見 奈良他所之者米を買候も右同前ニ相渡シ宿主所ニ抱置間敷事

一 侍方藏屋敷之外 於町屋米賣買之義 米を見届 可相極之請取候 日數者右同前たるへき事

右之條と藏元之米を賣候町人 同名代之町人 其外自分ニ致商賣候米屋中 此旨を相守へし 若違背之輩於有之者 本人ハ依其時之品 或死罪或籠舎 并手代之もの相背候とも其咎可相懸主人 違背之五人組 年寄 米屋ニ而無之候といふ共 可為曲事之間常々無油断吟味可仕者也

万治三年十一月二日 又左

隼人

覺

一 米商賣之義去年霜月二日ニ町中へ書出シ候五ヶ条之趣 米屋其外大名衆藏元之町人同名代之者共右之五人組 弥相守候様ニ可申渡候事

一 寛永之新錢御法度之悪錢を色とさしませ此比致商賣 下と迷惑仕候様ニ相聞候間 町中錢屋共之手前致吟味 様子承届 重而可申來事

一 しない商并請取普請日傭之出入裁許無之候條 互證文を取かハし無遣乱様子可仕旨 先年町中へ度と書出候 然處江戸火事ニ付而石切てことひ口之者又ハ日傭之者餘多可罷下候間 滯無之ためニ日傭双本請 下請之者 三郷之會所へ呼寄 兼而可申聞候 若滯於有之ハ日傭賃ハ其町中方可相濟旨 明曆三年九月八日ニ三ヶ條書出之候 因蔭去と年去年日傭之出入ニ付而目安上候もの多 其町中致迷惑由ニ候 旧冬迄ハ裁許申付候へ共 最早江戸御普請も相濟候間 先年申出候法のことく請取普請日傭之出入裁許有之間敷候条 相對にて埒明候様に可致覺悟旨請取普請仕候者日傭双共ニ可申含事

丑正月十一日 又左

隼人 三郷惣年寄中

覚

一 かこを持罷出賃を取何者ニ而も借り候得者夜中をかきらす方
 とへのせ参候者数多有之由ニ候 向後堺 枚方ハ勿論 其外在
 所と江かこをかり乗候もの有之ハ約束之宿迄送届へし 中途ニ
 而おろすへからず 若道ニ而かこを替候ハ、其籠かきを能見知置
 へし 如此申付候上ハ自然いたつらものニかこを借し穿鑿之時
 さきく於不知者曲事可申付事

一 従他所かこに乗参候者有之而其かこかき戻に大坂方人をのせ
 参候ハ、見付次第相改かこの宿を可存置事

一 手負其外不審成者かこを借り候ハ、昼夜をきらハす早と可申
 来 金銀卓散ニもらい候とてのせ参ニおゐてハ死罪可申付事

右堅可相守此旨 於令違背ハ急度曲事ニ可申付候条 宿主五人
 組常と無油断かこかき共に可申含 宿主五人組不念有之者吟味
 之上或籠舎過料可申付者也

丑三月廿三日 又左

隼人

覚

一 今度町中宗旨改之儀去々年申付候通 出家衆判形之筆本見
 届候儀三郷申合 いつれの町ハ幾日ニ北組いつれの町ハ幾日ニ
 南組 天満と順と二日を定 方角之惣年寄何も其席へ令出座相改

可申候病人ハ各別 自分之用ニ而惣年寄改之所へ不参無之様ニ
 互ニ可致吟味事

一 惣年寄住宅候町ニ而茂勿論惣年寄並ニ兼而申合候処ニ而何茂立合
 筆本見届ケ可申候 壺人として相究候義可為無用事

一 不及申候得共 諸出家へ對之不札無之様ニ尤ニ候事

一 右之通ニ相心得 三郷之惣年寄并惣代共立合 前廉にとくと相談
 相究 其趣出家衆へも申達 手形之文言等其外改様之作法相違
 無之様ニ可仕候 三郷思ひくニ有之候而は寺と町中可致混乱
 候間 一樣ニ可仕候 已上

丑七月十九日 又左

隼人 三郷惣年寄中

覚

一 大道へ家を建出候義可為曲事事

一 家を建候地形築候事 自今以後町之並を見合 脇と之不及難儀
 様ニ可仕候 只今迄建置候家ハ可為其分事

一 材木町ハ不及申 其外大道をせはめ 商人有之町ハ馬乗物自由ニ
 行違候様ニ道を明置可申候 川面ハ舟之かよひ自由ニ成候様ニ
 可仕候事

一 濱輪之納屋壁を付申間敷候 勿論竈を居へ住宅可為曲事事

一 家とおたれニ壁を付 本宅へ仕込申間敷候事

右之通從先年法度申付候へ共 弥不致違背候様ニ念を入 町中
可相触者也

丑十二月廿一日

覚

一 公事日毎月五日 十日 十四日 廿三日 廿九日 若御用有之而令

延引者翌日可罷出候事

一 奉行所之裏判有之目安を請 公事日及三度而令遅参者 先籠舎申
付其上可遂對決事

一 公事場江罷出者縦侍たりといふ共脇指不可差事

一 對決之時双方之外其場ニ出へからず 但親子兄弟ハ非制之限 并

證據人たるへきものハ門外相造召出候時可罷出事

一 訴訟人之事 公事以前ニ罷出 訴訟之意趣可申事

一 前廉相濟公事品を替目安指上者有之者 可為籠舎事

一 當座籠舎之者日数を定 此方々令赦免之間訴訟申来へからざる
事

右之條と慶安元年三月朔日

先代被申渡通 弥可存此旨者也

寛文式年四月廿八日 壹岐

隼人

西三拾三ヶ国之秤之儀豊後老人に被仰付候故 今度當町中へ秤
目輕重之不同豊後相改候間 一日ニ秤五六拾宛其町之役人豊後
所へ持参可仕候 能秤之分ハ用之 悪秤之分ハ奉行所江指上可申
候 并千木横秤 綿秤不残豊後所へ可致持参 若唯今迄之秤を隠
置つかひ候ハ、可為曲事候間 其町之年寄 月行司念を入可申
候

右之通町中へ可相触者也

卯五月廿一日 壹岐

三郷 惣年寄中

一 町中米賣買之儀大名衆藏米何程買候共 早速藏方出之可相渡候

賣候日より日数三十日之外於相延候者可為曲事旨 先奉行衆致

定置候 然處此比米高直ニ付而町人致迷惑候由訴訟仕候 是ハ日

数延候故にて候様ニ相聞へ候条 此以後ハ日数十日切ニ相定可

致商賣米下直ニ成候節者如前之申付候義も可在之候間 重而從

此方申渡候迄ハ十日切ニ可仕事

一 大名衆藏米に不相構米賣買之儀有米を見届可相極之候 請取渡
之日数ハ右同前之事

一 唯今三十日切之約束ニ而買之藏ニ預ケ置候米之分三十日切之内

日数何程相残候共 早速代銀を相定米を請取藏方可出之事

一 手形之賣買并米市を立候儀 先規之通堅仕候へからず 手代之
もの令違背者其科主人江茂可相懸事

一 大名衆蔵と并米屋有之候其町之會所又者年寄 月行司所迄帳を
仕置役人を相定 米賣主 買主之名 米高 同直段 月日書付順
と二年寄 五人組改之 日数十日迄三埒明可申事

右之通侍方蔵元仕候町人同屋敷之名代共外米屋中此旨相守へ
し 若違背之輩於有之ハ從先規仕置之通本人ハ依其品或死罪或
籠舎 其五人組 年寄 米屋ニ而無之といふ共曲事たるへし侍
方蔵米に付而違背於有之者其蔵米を肝煎之町人又者屋敷之名代
曲事ニ申付 其上蔵元之侍ハ主人江可相断候条念を入 此書付
之通無相違様ニ可致賣買者也

卯九月廿八日 壹岐

覚

一 米高直ニ付而日数三十日切之賣買を十日切ニ申付候処ニ其以後
直段さかり候 然ハ今程諸国方俵物あつまり候時分に候間 如
前と三十日切ニ申付帳を付候義も相止候 弥定之外延銀并手
形之賣買仕間敷事

一 蔵元之侍中へ申渡候書付之通 蔵屋敷之用を聞候町人共も同前
ニ相心得可申事

一 何によらず座ケ間敷賣買仕候ハ、惣年寄中間届可申上候 如此
申渡候上聞のかしに仕候ハ、年寄共可為不念事

右之通於會所可申渡候 以上

卯十二月朔日

先年之写

一 博奕其外賭之勝負停止たり 若相背もの有之ハ先年如相触其衆
中并宿主家屋敷欠所たるへし 親懸り之者ハ親之家を令欠所
親子共ニ大坂を追拂へし 但親於申出者親之家屋敷不可及欠所
然上ハ子可為籠舎事

付宿之兩隣五人組可為籠舎之間見聞次第可申出事

卯十二月朔日

當町中に致住宅候大工之分 家持借屋之者共に如先規万事中井
主永下知を相守可申候 若承引仕間敷と申候大工於有之者主永
支配之外之國へ參大工可仕候 但職を替候ハ、其儘指置可申候
右之通大工居申候町とニ而相改 主永下知相守可申と申候分ハ
今後相究り候年寄共手前方書付を取町ニ置可申候 主永下知ニ
付不申其儘ニ而大工可仕候と申者ハ當所ニ置不申候間町を拂可
申候 已上

卯十二月十五日

明曆元年當町中へ書渡三郷會所ニ出置候帳面之条数并其以後度
と書出候覚

一 慶安元年四月五日諸商賣其外仕置九ヶ条之事

一 同年同日町中御法度書七ヶ条之事

- 一 同年同日町人作法申出候書付八ヶ条之事
- 一 同年六月五日物會所并町と掛銀請拂之儀申出候書付三ヶ条之事
- 一 同年極月十六日自身番之仕置五ヶ条之事
- 一 慶安貳年九月十九日火事時荷物退候仕置三ヶ条之事
- 一 同年極月廿一日家屋敷賣買之儀申出候三ヶ条之事
- 一 慶安五年正月十一日町中御仕置之書出シ五ヶ条之事
- 一 同年同日諸商賣并家沽買跡式等之儀申出候三ヶ条之事
- 一 承應元年八月十八日御番衆之米買候仕置三ヶ条之事
- 一 毎年正月十一日ニ會所江町中より出銀請拂之儀申渡候三ヶ条之事
- 一 御番衆下と并出替之者宿之仕置三ヶ条之事
- 一 承應貳年二月十八日火事出来之時仕置三ヶ条之事
- 一 同年六月二日三郷惣年寄人数并相果候跡相續之様子書上ケ候通聞届候との書付三ヶ条之事
- 一 同年七月二日町中家屋敷賣買之書付三ヶ条之事
- 一 同年八月十九日御番衆 御加番衆下と江賣掛仕間敷候旨申付候書付三ヶ条之事
- 一 承應三年二月廿一日町人女房敷銀 諸道具 衣類等跡目仕置九ヶ条之事
- 一 同年三月廿二日米中買仕置三ヶ条之事

- 一 慶安五年八月廿三日町中牢人之儀ニ付惣年寄連判手形文言三ヶ条之事
- 一 同惣代共連判手形文言三ヶ条之事
- 一 掟之書出十九ヶ条之事
- 一 明暦元年十月以後度と町中へ申渡候書付之事
- 一 右年と申渡候帳面之通弥以可相守候 先法をあらため候儀者無之候間 三郷町と之年寄 月行司等惣會所へ呼寄 前廉年と之書付讀聞せ町と江写取 末と借屋之者共迄も不相背様ニ可申渡候 若違背之者有之而及僉議候時 件之書付不致承知候由申者於有之者 惣年寄不申渡候歟 又會所之申渡を其町之年寄 月行司 町人江不申聞候歟 穿鑿之上不念之方可為越度候条能と可申含者也
- 寛文四年辰三月廿八日
- 石見
- 壱岐
- 惣年寄
- 定
- 一 絹紬之義壱端ニ付而大工かねにてたけ三丈四尺 幅壱尺四寸たるへき事
- 一 布木綿之義壱端付而大工のかねニ而たけ三丈四尺 幅壱尺三寸たるへき事
- 右之通此已前方被相定候處近年みたりニ有之間 向後書面之寸尺より不足ニ織出輩於有之ハ曲事たるへし 来巳年秋中カ改之

不足之分見出次第可取候間 諸国在と所とにおゐて 可存其趣者也

辰七月十三日

右之通從御老中御書付被下候間此旨堅可相守者也

辰八月十一日 石見

壱岐 町中

覚

一 兼葭 萱 柴之類九尺方高ク積申間敷候 濱口之道明置候様ニ可仕候 此外何ニ而茂積置候所濱口之道明置可申事

一 材木屋町之通道前廉如申付九尺よりせはく仕間敷候事

一 火事有之時のためニ候間 公儀橋之分橋臺方地らい明置候間敷

地方之役人可申渡候事

一 町橋ハ方角之惣年寄見分之上 明置候地らい間敷可申渡事

一 此以前も如書出 夜更候而船を乗ありき候儀弥無用可仕候 自

然のりあるき候者有之者見合ニ相改 不審成者ハ奉行所江召連

可参事

附夜更陸をあるき候者も同前之事

一 宿かり居候者并召仕候者夜更罷出不審有之者無油断心を付可

申事

一 火事出来之刻見物計に罷出者有之ハ相改急度可申付事

右之通堅可相守旨 町中可触知者也

寛文四年辰八月十一日 石見

壱岐

年寄中

覚

金銀掛之分銅之儀從此以前後藤四郎兵衛仕来之処 近年猥になり似せ分銅用つかふよし其聞へ有之候 向後堅可為停止也

一 分銅壺流数拾七 但此目四百六拾五匁五分也

此代銀廿五匁

一 五百目之分銅壺 此代銀拾五匁

一 三百目之分銅壺 此代銀拾匁

右新規拵出之代銀也

一 極印無之分銅改之壺流分極印打候

代銀八匁

一 極印無之五百目之分銅改之極印打候

代銀五匁

一 極印無之三百目分銅改之極印打候

代銀三匁

右之通ニ候間極印無之分銅所持之輩ハ京都 大坂 江戸手より

次第四郎兵衛所江遣之極印うたせ 此定之通打賃出之可用之

若此上にせ分銅其儘蜜と用つかふにおゐては来年正月方以後

ハ改之 急度可行罪科者也

寛文五年二月日

覚

江戸町中薬屋共私として座をさため 薬種之内何によらす一所ニ買
取しめ賣致高直ニ仕 又はにせ薬種等有之由ニ候 自今以後堅為停
止之間存其趣 自然相背者於有之者薬屋中間たりといふ共訴人に出
へし 若隱置他所よりあらわれ候ハ、可為曲事事之旨 於評定所薬
種之間屋并薬屋共ニ被仰付候 惣而薬種ニかきらす諸色を定しめ賣
いたし候者有之者町奉行所江可申来之旨江戸町年寄共ニ被仰渡候
右之通急度可申付之由 御老中方被仰下候間 可相守此旨候 薬種問
屋薬屋共ハ召寄申付候者也

午九月廿九日 石見

壹岐 三郷惣年寄中

覚

大坂町中鉄砲所持之者於有之者筒数 長サ 玉目数書付候ハ町之年
寄来月十日迄之内ニ番所へ致持参帳ニ付可申候 但鉄砲者不及持参
候 勿論今度改候節帳に付ず隱置以來鉄砲所持之儀於相知者 其身ハ
不及申町之年寄 五人組迄可為曲事旨可相触者也

午九月廿九日 石見

壹岐 三郷惣年寄中

覚

一 借在家構佛壇不可求利用之旨於江戸諸宗江被仰出候間 町中存
此趣清僧を置へからす 有来妻帯道場之外ハ縦佛壇無之とも町
屋ニ出家致住宅聴衆を集法を説之儀此以前ハ停止之間 令違背
者其町中可為曲事事

附往来之出家當座之宿日数廿日ニ過へからさる事

一 学文を心さし一寺をも望候僧侶勿論住持 隱居 同宿道心者ニ
而も一旦寺中ニ罷有候僧者町屋等住居成間敷候 環俗之者者各別
之事

一 當地住宅之町人渡世難成 髪を剃躰をひらき 或隱居之者或親
類等にわかれ表 傷之餘り致落髪 戒律をたもち法衣を着し
候とも前後寺中ニ居不申者ハ町中ニ住宅不苦候 人を集法談か
ましき義ハ仕間敷事

一 他所より躰ひらき坊来るニおゐてハ能遂吟味宿をかすへし不
念候儀有之ハ其町中曲事たるへき事

一 西東両本願寺 高田専修寺 佛光寺 大念仏寺 右五ヶ寺之末寺
并宮社町中ニ有来候 向後町屋を寺社屋敷ニ賣候ハ、番所へ相断
可申候 無断賣申間敷事
右之通町中可触知者也

午十一月十五日 石見

壹岐 三郷惣年寄中

覺

一 諸町人之内身躰不成欠落之者數多有之候 先年ハ欠落之者跡ト
 家屋敷 金銀 諸道具 着類等欠所に從先規被申付候へ共 近年
 負せ方賣掛之者共證文次第先奉行方割荷ニ被申付候 然共身躰
 つふれ候欠落之跡ハ纔ニ成 配當ニ而其町人切ニ断に罷成 商賣
 之妨ニ成 可致迷惑事候間 自今以後ハ如此已前欠落之町人有
 之ハ跡式欠所ニ可取上候条 其町人如例可申来事

一 欠落者ハ何年過候而茂有所知候次第 負せ方賣懸ニ而銀子可取之
 事

一 闕落之跡に有之諸道具之内預ケ物預ケ主之證文次第可戻候条
 申来へし 但御法度相背欠落者之跡者可為各別事

一 欠落人之預ケ物 親類縁者ハ不及申 預り主可申出之 隱置以後
 相知におゐてハ可為曲事事

一 欠落者家屋敷之儀質物ニ取候共賣券状次第ニ可申付候事
 右之通町中可触知者也

午十一月十五日 石見

壹岐 三郷 惣年寄中

覺

一 町中ニ前髪有之者を隱置 遊女同前ニ方トへありかせ候様ニ相
 聞候間 自今以後無用ニ可仕候 若違背輩於有之者宿主ハ不及申
 家主并五人組可為曲事事

一 町中に異名を付徒者於有之ハ宿主并町人可申出之 隱置おゐて

一 八宿主曲事ニ可申付 家主町人ハ可為越度事
 荷持并籠かき所を定 座之様ニ仕間敷事

右之通町中江可相触知者也

午十一月十五日 石見

壹岐

三郷

惣年寄中